

絵本で子供たちに伝えたい

————— HAPPY CREATOR たかい よしかず さん

お母様は洋裁の先生

取材の日なたかいさんが着ていたシャツは、たかいさんがデザインした布でつくられたもの。洋裁の先生であるお母様が縫ってくださったそうだ。

「実家には布や図案集がいっぱいあって、かごの中で色とりどりの糸がからまってたりするのは、すごくきれいでした」



絵を好きになる環境に育ち、スムーズに芸術大学へ、と思ったが、そうでもなかったらしい。

「高校に行って、進路どうするねんというときに、自分は絵を描きたいなと思って、大阪芸術大学があるな、と。3年の夏休みに、大阪芸術大学デザイン学科で夏期講習っていうのがあるのを知って、それに応募したんですよ。200人くらいの生徒が来てて、1週間か2週間、毎日行って課題をこなして、いちばん最後の日に面接があって、あなたは今回受講している人たちの中でどれくらいの成績ですよ、と言ってくれるんです」

「自分はちょっとは絵が描ける、と思ってました。でも『君の成績は198番』って言われて、耳を疑いました。『下から2番か3番ということですか』って聞いたら『そやなあ』って言われました」

「そんなんやったら絶対受かれへんわあ、と思って、とりあえず家に帰って親に話したら『駅のところに

受験生のための絵画教室

というポスター貼ってあるの見たわ』と言うんです、うちの母が」



たかいさんは、すぎる思いで、その絵画教室を訪ねる。

「女性の先生だったんですけど、とりあえず絵を描いてみなさい、と電球をひとつ渡されてデッサンしたんです。『できました』って言ったら、

ひと目見るなり『あんた今日から絵描いて帰り』

って。まだひと言も『入ります』って言ってないうちですよ(笑)」

大慌てで絵の受験勉強

たかいさんは高校3年の2学期から、学校の帰りにそのまま「受験生のための絵画教室」に行って絵を描き、最終電車ギリギリに家に帰るという毎日を送る。

「デッサンも教えてもらってたけど、もう間に合わへん、あなたはデザイン学科に行きたいんやったら

絵を描くしかない、絵を描きなさい

と言われました。まわりは2年生くらいから絵の勉強しに来てる子ばかりで、すごいデッサン描いてましたね」



たかいさんはその先生に「いまでも頭があがらない」という。それは、たかいさんが無事に大阪芸術大学に合格できたからだけではない。

「先生がね、

大学に入学できたら授業料は自分で払いなさい

と、アルバイト先も紹介してくれたので、毎朝5時に卸売り市場に行ってバイトをして、終わったら大学に行って、というのを2年間くらい続けました」

「それから、もし大学に入学できたら、

学校の勉強をしてるだけじゃなく、公募展のひとつにも出しなさいよ

と言われました」

「二科展はその先生も出されてたんで、大学1年のときからデザイン部門に応募しました。もちろん落ちてばかりでしたけど、いま僕が勤めている会社の方が見てくれていて、その縁で就職の話が来ましたからね。絵画教室の先生に就職まで世話してもらったようなものです」

いまは会社のお仕事も忙しいたかいさんだが、先生に言われた通り、これからも公募展やグループ展等にはできるだけ出品したいそうだ。

「作品をつくって出せば、入選するかどうかは、どうでもいいんです。メ切りがあるから、なんとか描いて出す。出品できたら作品が残る。5回くらい続けば個展ができますから。落ちたら、なぜ落ちたか考えて勉強になるし、ライバルも見つかります」

丑年の女性がたかいさんを救う

たかいさんがとてもお世話になった絵画教室の先生は、たかいさんより二回り上の丑年の女性。

展覧会が迫るのにスランプに陥っていたとき、その作品や考え方でたかいさんに刺激を与え、創作意欲をよみがえらせてくれたのは、フラッグ・デザイナーの福井恵子さん。福井さんも丑年。

さらに、会社の仕事が忙しいときに助けてくれた女性たちも、なぜかそろって丑年だったそうだ。